

第32回『謳粹会』の記

日時 平成13年4月7日 15時30分
会場 土浦・藤崎『ふじ吉』

今年もお花見は母校を訪ねることになった。例年になく開花が早いので、月例会の日を一週間早めたのだが、果たしてうまく花に会えるかどうか心配だった。そしてもう一つの気苦労はお天気だった。週間の天気予報によると、どうしてもこの日は雨になっている。旅行が雨に遭うことほど情けないものは無い、傘を差してお花見では全く様にならないので、照る照る坊主は造らなかったが、曇りでもいいから雨の降らないことを祈っていた。実は昨日、昔の会社の同僚六人の男女が墨田公園に集まり、向島のお花見を楽しんだし。そして、その二日前には詩吟教室の終了後、これも男女六人で、飛鳥山の桜見物とシャレこんだ。すつかり近代的公園に整備されて、面目を一新した飛鳥山だが、桜の姿は尚一層華やいだ様に思われた。

桜の名所は全国に数多くあるが、私の行った中で素晴らしいと思ったのは、まず第一は弘前城の桜だろう、これは毎年ゴールデンウィークの頃が花盛りで、お城を取り巻く7千本の桜が一斉に咲き乱れ、これほど豪華絢爛なものは他には無いと思われる素晴らしい三年続けて行った思い出がある。お城の近くに『高砂』という立派なお蕎麦屋さんがあったが、今でも美味しい蕎麦を提供して流行っていること思う。

桜と言えば、我が故郷に縁起する謡曲『桜川』は有名であり、桜の精の物語を古典芸術が今に伝えている。

私の子供の頃は、「お花見」といえば桜川の土手であり、また、亀城公園では賑やかに「桜祭り」が繰り広げられた。『桜川』は、大勢の花見客で賑わったが、河川の改修で、敷島町から栄町までの桜が伐採され、今もって代わりの桜が植えられていないのは、実に寂しいと言うよりは、情けない思いで、早く昔を取り戻して欲しいと思う。

その頃、新川には桜は無く、流れも細く汚れたドブ川だったが、終戦後に植えた桜が立派に枝を張り、川も浄化されてボンボリの明かりが、花筏の間に映って、素敵に桜が見られる様になった。

昭和30年に私は、北陸線の電化工事に参加して木之本に陣取っていた。年度末の仕事が片付いたら「帰ってもいい」と言われ、帰途に着いたのは、4月5日だった。つい先日まで、雪に見舞われていた湖東にも春がやってきて、姉川の堤の桜も咲き揃い、長浜の街も桜の花に彩られていた。その頃私は独身だったので、誰も待つ人は居ないのだが、とにかく早く帰りたい一心で、目の前に立っている七本槍で有名な、賤ヶ岳も見ないで帰ってしまった。東京に帰り着くと、東京も花見で浮かれていた。それから数日後、仙台に出張すると、桜前線はここまで伸びており、この年には、三ヶ処で花見を楽しむことができた。長浜の『鳥新』で「鴨鍋」に舌鼓打ったのはそれから後のことだった。吉野の下市も訪ねたことがある。ここは見渡す限り一面花の山であり、俗に一目千本というその豪華なロケーションには圧倒される。下の千本、中の千本と、段々花が山を上って行く、そして、奥の千本に達するのは、1ヶ月ほどかかると聞いた覚えがある。ここでは、歌舞伎の「義経千本桜」で知られる『弥助鮎』に寄って、鮎ずしを食べて帰った。創業は840～850年で、私が訪ねた当時の当主は、48代目というから、連綿と続く歴史のある老舗の味を見て帰った。その時のご当主は、「いがみの権太」のようながさつではなく、優男の面持ちであった。その当時は「釣瓶ずし」もやっていたが、今はどうだろうか。尤も「釣瓶ずし」は、近江の「鮎ずし」の様にナレずしなので予約の注文をして何日も待たなければならない。勿論、『弥助鮎』には、鮎料理のコースもあって、様々な鮎の味が楽しめる。吉野にはもう一軒『平宗』があるが、こちらは鮎ずしや鮎料理よりも「柿の葉ずし」が特に有名な店である。

京都の桜では、祇園の八坂さんをはじめ、知恩院、哲学の道など随所が花で埋もれる。

嵐山と言え直ぐに渡月橋が思い出される。錦の花見弁当を広げて観る桜もよいが、桂川の舟から眺める風景も一興だ、そういえば、この地にある『吉兆』京都店を訪ねたの丁度、桜の盛りの時期だった。そして、今は亡き浪速千恵子のお店もこの近くだった。京都で特に私の気に入りは仁和寺で、ここの桜の木は背が低く幹も細い。花の咲くのもほかの桜よりは幾分遅いのではあるまいか、それは、小石を積み重ねたような土壌に、冷たい伏流水が流れているため、木が大きく育たないのだと言う話を聞いた。

大阪もお城や淀川の堤防の桜も良いが、なんと言っても伝統的なのは大阪造幣局の桜だろう、ここの桜は八重桜なので、少々咲くのが遅れる。この花の時節だけ一般に開放され、花見の通り抜けが出来る。そして、毎年オリジナルのデザインを施したメダルが販売されるので、マニアは花より団子ではないが、これを目当てに参加する人も多いと言う。今年21世紀初のメダルなので、特に参加者が多いのではないと思われる。山口県では、清冽な錦川に架かる岩国の錦帯橋の周辺が美しく、五橋と桜のポスターが観光宣伝に使われている。今年も花の時季にはライトアップされるが、橋は経年劣化のため今年架け替えが行われるそうだ。あの立派な太鼓橋に釘が一本も使用されていないそうだから、昔の匠の技には驚きだ。夏にはここでも鶉飼が行われる。

四国に渡ると、徳島の眉山や高松の栗林公園もよいが、定年退職した年に同僚数名で伊予西条を訪ねた。この時は、花の褥に包まれて一日中酒を楽しんで居た様な気がする。翌日は今治から海路尾道に向かう途中、大三島に立ち寄り、大山祇神社に詣でると、刀剣や甲冑が納められて、かつての水軍の強大さを物語っている。そして、西の東照宮と言われる生口島の耕三寺に額ずき、無事、島並み街道を通過して広島から帰京した。

高遠の桜は日本一という、その高遠にも何度か行く機会があり、三度はかり城址公園の花見もした、ここの桜はコヒガン桜といって、花びらの小さい可愛い花で、満開になっても、1500本ある桜は花の雲とは言い難いので、弘前の桜に比べると問題じゃ無いです。ここにはかつて、大奥女中の絵島が幽閉された質素な「囲み牢屋敷」が、復元されて建っている。絵島は七代將軍家継の生母に仕える大年寄（老中格）で、生島新五郎との恋愛問題が発覚し、お咎めを受けたものと思っていたら、実は、將軍後継者問題に絡む権力闘争と、大奥の肅正問題のための犠牲となったとあり、時に絵島は34才であったという、それから27年間、八畳一間の部屋からは一歩も外出できず、一日二食の粗末な食事、苦難に満ちた一生をここで閉じたという。高遠を訪ねて、名物の馬刺しや蜂の子で飲むのは楽しかったが、こんな裏話があったとは露知らず、後から知った話であった。

桜の名所は全国に数多くあるが、有名なものを幾つか挙げると、福島県の三春には、有名な三春の滝桜がある。三春とは、梅、桃、桜が一斉に咲き、三つの春が同時に訪れる所から名付けられたという。これは紅枝垂れ桜で、樹齢が1000年余り、高さ約12m、根廻り11mもあるという巨木で、四方に伸びた枝が風に揺らぐ様は、薄紅色に染めた滝が、ほとぼしるかのように、無数に咲いた小さな花が、あたかも流れ落ちる滝の如くに見えるので素晴らしい。大正11年に国の天然記念物の指定を受けている。

会津五桜は、会津若松周辺の五本の古木（薄墨桜・虎の尾桜・杉の糸桜・石部桜・大鹿桜）で、それを、総称してこう呼んでおり、それぞれに個性的な美しさを放つこれらの桜には、歴史ロマンたっぷりの秘話が伝わり、地元の方々にも長く愛され続けております。又、会津地方は酒造の盛んな所で、50近い酒蔵がその旨さを競っている。

また、みちのくの小京都と言われる角館の武家屋敷を取り巻く枝垂れ桜も素敵だ。

大垣から樽見鉄道で行く、根尾の薄墨桜も寿命かと思われたが、地元民の手厚い看護が稔って回復したという、今頃は賑やかに花見が行われていることだろう。

岩手・盛岡では裁判所前の石割り桜であり。名物のわんこそばを74杯食べた事がある。新潟の加治川堤防の延長5kmの花のトンネルが有名だったが、河川改修のために数年前に全部伐られてしまったのは残念なことだった。

富山もお城の桜は4月の半ば頃が満開で、ここでは毎年全国チンドン大会が賑やかに行われ、ホタルイカが獲れ初める頃で、これから1ヶ月が漁期だが、ホタルイカを生魚の刺身で食べられるのも地元ならではの特権だろう。佐渡では小木の鹽舟の歓迎を受け、真

野御陵の雲井にまごう桜は圧巻だった。島には7つの蔵があり、地酒で魚が旨かった。私の干からびた桜の思い出を長々と書いてしまったが、さて今日の花見の方はというと、心配した雨も無く、青空の光り輝く桜の花が、来る途中の車窓からも、ここかしこに見ることが出来て、絶好のお花見日和になったので嬉しくなった。

土浦駅に着くと、野村ルナさんが迎えに来て、一高迄送ってくれた。一高には既に数人の方が集まっていて、山藤さんは久しぶりの顔合わせであり、わが級友の中川さんの姿も見える。高橋さんには今回大変お骨折りを頂いたのでお礼を言うと、天川支部が毎年一回発行している会報を頂いた。立派な表紙の付いた50頁にも及ぶ文集で、支部の活動の活発な様子が窺える。昨年は、本館前の枝垂れ桜の前で記念撮影をしたのだが、今年は花が終わってしまっていた。でも、他の桜は今日が満開で見頃のように思われた。後続の人達の来る間にと、鈴木（篤）、田村、高橋さん達と隣の真鍋小の桜を見ることにした。校門を入ると桜祭りの人達で賑っており、子供達も大勢居て、クジを引く子、貰った水飴を二本の割り箸で練り合わせる子、そして前方を見ると、これは凄い、雪を深く被った様な桜の大木が4本もあるではないか、そしてそのうちの一本に消防の梯子車が仕事をしている。多分今夜の桜祭りのために、ライトアップの準備をしているところなのだろう。桜の前に立札があって「この桜は明治40年、真鍋小学校創立の時に植えられた」とあるから、もう百年近い歳月を経ているのだ。私の母親もここで学んだのだが、その頃はまだ木も若かっただろう、それが今は、幹の周りは4米もあるという。

何とも素晴らしい桜に感激して一高に戻ると、後続の方達も見えたので、校門をバックにして記念写真を撮り、別れて夫々に宴会場の『ふじ吉』へ向かった。

学校では本日は新入生の入学式が行われているそうだが、どこで何が行われているのか、シーンとして何も分からなかった、唯、記念写真を撮る写真屋（大久保）さんだけが、忙しそうに本館前で脚立を組み立てていた。

宴会は皆さんお揃いの処で、会長の挨拶から始まった。「今年も昨年同様、母校の花見が出来ましたことは、皆さん方のご協力の賜物と深く感謝しております。尚、本席を開くに当たりまして、地元、土浦の熊木、高橋のお二人の方に大変お骨折りを頂きましたことを、この席を借りまして厚く御礼申し上げます。どうぞ皆様方、折角、故郷の宴席でありますので、時間の許す限りゆるゆるご歓談くださいます様お願い申し上げます」と言うことを言われ、次いで熊木さんから本日のお酒について、紹介があり、

つくば市吉沼の浦里酒造店「霧筑波」 1.8ℓ 銀醸と同じく「霧筑波」 1.8ℓ 純米大吟醸（これは中川さんの寄贈品）次が、これも県内那珂郡・木内酒造（菊盛）「春一輪」吟醸にごり酒 1.8ℓ、その次が高知県土佐市亀泉酒造（株）「亀泉」純米酒 1.8ℓ 福井県松岡町黒龍酒造（株）、「黒龍」いっちょらい吟醸 1.8ℓ、最後は、秋田県平鹿町浅舞酒造（株）「天の戸」 1.8ℓ で仕込みに亀の尾を使用したという珍しいもので、これから飲まれる6種類のお酒の紹介は終わった。

その後、会長の同級生の中川さんが乾杯の音頭をとって、会の益々の発展と、会員の健康を祈り、皆さんもそれに唱和して、宴は和やかに始まりました。

西村（昭31年卒）さんは今年もご出席頂き、先月初参加の菊池弘輝（昭31年卒）さんも続いてご出席され、初参加の中川平（昭20年卒）さんに大塚守善（昭31年卒）さん中原之夫（昭31年卒）さんのお二人も新しく加わって、会を一層盛り立ててくれました。

◎本日の料理

平成十三年 卯月

ふじ吉

小 鉢

よもぎ豆腐 べっこう餡 生姜 桜花

先日、さる処でフキノトウ入の胡麻豆腐が出た。フキの香りが強いので胡麻の香りが消されはしないかと思ったが、それ程のことはなく、反って春の新鮮さが強調されて良かった。今日のヨモギもいかにも春らしい装いで、天に添えた一片の花びらがとても愛らしく、何とも言えないその初々しさが、はじらう乙女の姿を見るようで、

一層春を感じさせる装いであった。

刺身

かんばち、鮪、

かんばちはひらまさと並ぶ高級魚で夏が旬とされているが、身の締まりから鮮度の良さが伺われる。鮪も最近世情を賑わす食材だが、赤身のまったりした味は鮪の身上だ。今の内に食べて置こう。

焼物

カレイ素焼き

花びら百合根 酢蓮 レモン 紅白はじかみ

鰈は種類が多く、世界中で 100種類くらい食べられているそうだが旬は大体寒い時期のものが多く、甘みがあって、上品な味わいだ。

蒸し物

甘鯛桜蒸し

銀あん 青味 海老 花卉百合根

甘鯛は、赤、白、黄の三種類があって、中部以西の海で多く漁れるので、あまり関東には馴染みの薄い魚だ。だが、京・大阪では別名グジと称して、料理には良く使われる。殊に京都では、若狭物（小浜辺りから、獲れたてに塩をして、一昼夜かけて京に着く頃には、丁度塩が馴染んで良い味になっている）が珍重され、数多くの料理に用いられる。甘鯛に桜の香りが染みてお椀の中に春を盛り込んだ季節の味が嬉しかった。

揚げ物

鱈天ぷら

たらの芽 天つゆ

鱈は淡泊で上品な味、クセが無いので、色々の料理に使われるが、天タネとしては高級なもので、旬には少し早いですが、添えられたタラの芽が季節感を呼び、サッパリ味がお酒と仲良しになって、ついつい杯を重ねてしまう。

酢肴

生くらげ

針胡瓜 胡麻油 割ポン酢

くらげは、一般に塩クラゲを戻して使われるのが普通だが、ここでは生くらげが出された。クラゲ自体は味の無い物だろうが、割ポン酢に胡麻油を効かせた味の良さがクラゲを包み、美味しく食させてくれる。あのコリコリした歯触りが、又何とも言えぬ感触。

◎本日のお酒

霧筑波

吟醸

1.80

(資)浦里酒造店

茨城県つくば市吉沼 982

☎0298(2)4585

代表者

杜氏

()

原料米

精米歩合

% アルコール度数15.0~16.0

日本酒度+

酸度

アミノ酸度

使用酵母

協会 号

仕込水・水質

蔵元が語る特徴

霧筑波

純米大吟醸

1.80

原料米

精米歩合

% アルコール度数15.0~16.0

日本酒度+

酸度

アミノ酸度

使用酵母

仕込水・水質

蔵元が語る特徴

春一輪 吟醸にごり酒 1.80

(菊盛) (資)木内酒造 茨城県那珂郡那珂町鴻巣1257 ☎029(298)0105

代表者 木内造酒夫 杜氏 高橋金太郎 (南部)

原料米 美山錦 精米歩合 55% アルコール度数 15.8

日本酒度 +5 酸度 1.5 アミノ酸度 1.0 使用酵母協会, 9号

仕込水・水質 那珂川系の伏流水・硬水

蔵元が語る特徴

蔵元が手間暇かけて仕込んだ酒「大吟醸」。

水晶の様な米の芯を原料に仕込んだ吟醸酒のうすにごり酒です。

一切熱処理していない本生です。酒の中に酵母が生きています。

その新酒の出来具合を競う日本酒品評会。その中で最も権威があるのが、国税庁醸造試験所主催の全国新酒鑑評会です。

当社の清酒「菊盛」は、平成2年・3年・4年連続で最高峰の金賞を受賞しました。

連続金賞の技術を用い、今後も美味しい酒造りに努めて参ります。

梅が枝に鳴きて移ろう鶯の

はね白妙に淡雪ぞ降る

酒の味を左右する微量成分

搾りたての新酒にしても、夏を過ぎて熟成した酒にしても、口当たりがキレイで、然かも旨味があり、喉越しがスッキリした酒を飲んだ後は気持ちがいいものです。

反面、一口含んだだけで、何かクドイような雑味のある酒に出くわすと、折角の料理の味までが損なわれてしまいます。一般の方は、「同じ様に造っているのだろうに、何故こんなに味が違ってしまうのか？」と不思議に思われるかも知れません。この内、苦みと渋み成分が極微量だと、味にコクが出て旨味を増しますが、この成分が多いと、嫌な雑味になってしまいます。

その他、清酒の中の糖やアミノ酸を始め、色々な成分の量でも味が微妙に変わって来ますから、「菊盛」は優れた技術と細心の注意で、品のいい香りど、深みのある味造りに努めています。

亀 泉 純米酒 1.80

亀泉酒造(株) 高知県土佐市出間2123-1 ☎088(854)0811

明治30年創業 代表者 西原一民 杜氏 西原一民 (高知)

原料米 土佐錦 精米歩合 60% アルコール度数 15.0度

日本酒度 +5 酸度 1.4 アミノ酸度 1.1 使用酵母 A-14

仕込水・水質 井戸水・軟水

蔵元が語る特徴

高知県産の米、酵母にこだわっています。三軒茶屋の銘酒居酒屋

『赤鬼』でも人気銘柄に選ばれております。

いっちょらい 吟醸 1.80

黒龍 黒龍酒造(株) 福井県吉田郡松岡町春日1丁目38番地 ☎0776(61)0038

代表者 水野正人 杜氏 高橋貞実 (南部)

原料米 五百万石 精米歩合 55% アルコール度数 15.0~15.9

日本酒度 +5 酸度 1.3 アミノ酸度 1.1 使用酵母 蔵内酵母

仕込水・水質 白山系伏流水。

蔵元が語る特徴 フルーティーな香り、癖の無い透明な旨さ。

天の戸
亀の尾

1.80

浅舞酒造(株)

秋田県平鹿郡平鹿町 388

☎0182(24)1031

代表者 柿崎秀衛 杜氏 守谷康市(平賀)

原料米 亀の尾 精米歩合 50% アルコール度数 16.8

日本酒度 +5.0 酸度 1.7 アミノ酸度 1.3 使用酵母 AK-1

仕込水・水質 琵琶寒水 (自社敷地内に湧出)

蔵元が語る特徴

大正6年創業、すべて県産米を使い、地元の人と自社湧水“琵琶寒水”を使い、丁寧な手造りをモットーに、穏やかで線のキレイな酒質を保っている。特に大吟醸「天の戸」と「うましね」にその良さが出ている。

【追記】

お花見と言うので、前段にこれまで歩いた花見を記録したつもりだったが、肝心な東京・上野の花見を忘れていた事に気が付いた。江戸の三大花見と言えば、上野、向島、飛鳥山で、上野のお山の桜も、あの広い公園全体を桜の花で覆い尽くす、実にスケールの大きな立派なもので、最初に弘前の桜を褒めたが、それ以上の規模ではないかと思う。私が最初に勤めた会社は、不忍池を望む池之端にあった。土浦から常磐線通っていて、いつもは不忍口で降りるのだが、桜の季節は公園口で降りて、桜の花の下を清々しい気持ちで通った。時刻は8時頃なのに、もうその時刻に花見の陣取りをする人が居た。上野公園の北側には谷中の墓地があり、ここの桜も素晴らしい。お墓の中なので酒盛りをしている人は居ないだろうと思ったが、さにあらず、ご先祖様の霊を慰めている？方達が結構沢山いる。東京の桜開花のバロメーターは、靖国神社の社殿の右側の桜だと教えられて確かめてみた。ここで、夜桜見物をした事もあるが、花で覆われた境内が人で埋まる、場所の確保が難しかった。千鳥ガ淵の夜桜会も吟友数人と三度ほど行った事がある。花見弁当、酒・肴を携えて、何時も腰を据えるのは、エドモンドホテルの付近だった。ここはお堀の向こうまでライトアップされているので、その美しさが一層楽しめた。そして、酔いにまかせて詩を吟じて悦にいていた。この他千束池や馬事公苑など数え上げたらまだまだきりは無いが、最初に書き忘れたのを書き加えました。

訪ねきし桜に偲ぶ六十路過ぎ
はらはらと桜こぼるる学び舎に

出席者座席表

	(昭41)	(昭41)	(昭31)	(昭31)	(昭31)	(昭31)	(昭46)	
	高山	長戸	郡司	鈴木	田村	酒井	海老原	
	了	琴	賢一	篤夫	恒	隆二	順	
(昭31)	○	○	○	○	○	○	○	(昭31) 高橋義尚
大塚								○(昭31) 熊木士郎
守								○(昭31) 大野金一
善								○(昭31) 西村邦夫
								○(昭20) 篠田 康
								○(昭20) 中川 平
(昭31)	(昭31)	(昭31)	(昭31)	(昭31)	(昭38)	(昭31)	(昭27)	(昭23)
横手	関	本	中	菊	野	蓮	坪	山
一	隆	川	原	地	村	幸	井	藤
郎	之	軍	之	清	ル	治	洋	和
		司	夫		ナ			夫

(篠田記)

【次回予定】 5月13日（金）18時30分 新橋1丁目『越州』